

日本赤色救援会声明

その1

我々は本紙4号(2月21日付)で「連合赤軍・銃撃戦・断乎支持」の立場を表明し、敵権力のあるゆる反革命行為を全人民の前に明かにし、これと闘ってきた。しかし、この銃撃戦における敵北を媒介にして連合赤軍内の「党内闘争」が明かにされ敵権力の全面的な攻勢が開始されている。我々はこの敵の全面攻勢に対して抗してゆくことを前提として問題点を整理してゆかねばならない。そしてこの問題点の整理とはこの間の事実関係を明らかにするに止まらず、当然にも日本に於ける階級闘争及び赤救運動の総括へと発展させるれねばならないが故にかなりの長期に渡る苦しい作業であることが、予想される。

しかしながら今回の事態及びこれから派生した重大な問題を我々は避けて通ろうとは思わないし、又それは許されることではない。更にこの問題は、日本のそして世界の階級闘争を隔る諸戦線に亘りやがらうにも波及せざるを得ないし、敵はこれを最大限に利用して各戦線を分断し、右傾化させようとするだろう。我々、プロレタリアート人民は、その団結を崩してはならないし、更に団結してこの問題を階級闘争—社会主義革命戦争の発展

88

- 労働者、人民諸君、反撃を用意しよう！
- ☆、あらゆる偏見を排し、革命戦争の大道につけ！
 - ☆、権力—商業資本の一体となった歪曲化政策に抗し、共産主義の政治を！
 - ☆、階級闘争—革命戦争の歪曲化攻撃に抗し、団結せよ！

3月11日、

に向けて止揚してゆかねばならない。

その為に我々は最低限次の3点の確認をしておこう。まず第一点として、この問題は人民内部の矛盾であり粉砕対象ではなく止揚すべき対象であること。第二点目、従って廣の連合赤軍兵士を敵の抹殺行為から防衛し、この問題を契機にして敵の更にエスカレートするであろう反革命弾圧、その主要環であるところの階級闘争の歪曲化攻撃に抗し、人民内部の矛盾は、人民の手によって解決されるべきであるべきであることを明確にし、人民内部の矛盾の解決をその一部たりとも敵の手任せに任せてはならないこと。第三点として「もつがる通信NO.4」の我々の立場を更に明確にすると共に誤りは正し、赤救運動の基本路線(人民の軍隊—人民の武装闘争の陣型の創出)の正当性を断乎として再確認し、これを守らねばならない。

以上の意味から、我々の闘いは、断乎として継続されねばならないが、我々自身の飛躍をかけて赤救の路線を具体化し、武斗の組織陣型の下、党一軍の結合をなし切る作業をがまん強く進める事を抜きにしてはありえない。そして緊急の任ムとして、本問題の内容、事実関係を把握し、その上で我々の組織見解を提題する事を約し、この作業に全力を傾けると共に、現行の公判対策部、支援委運動を、引き続きすすめてゆきたい。すべての

89

日本赤色救援会声明

その2

運動の昂揚局面よりも、敵北局面においてこそ、日頃、戦斗的革命的言辭で裝飾していたその運動主体の真価が向われるところである。

両者は、不可分の、冷厳たる現実であるにも拘らず、連合赤軍兵士の体現した武装闘争のリアリティは、「銃撃戦」—「党内斗争—処刑」を前後にして、権力—マスコミの悪意と偏見の下に報道された。「銃撃戦」として体現された連合赤軍兵士の英雄的苦斗に付いては、共に闘うものとしての支持表明はおろか、何ら意志表示もせず、結果的には、権力—マスコミの総攻撃を容認した多くの部分が、今や「党内斗争—処刑」が表面化するや、それをもって何と厚顔にも、鬼の首でも取ったかの如く、連合赤軍兵士の苦斗によつてのみ体現された武装闘争のリアリティを、こきおろし、何と破廉恥にも、自らのみが免罪されるかの如く、その冷厳たる深淵を、空虚な理念像をもって対置し、諷刺している。ましてや、権力の手中に捕虜となっている兵士たちへの「性格異常」云々の人格論議など論外である。おお、何たるこの厚顔さ！何たるこの破廉恥さ！

我々、日本赤色救援会は、その発足以降の基本

91

認証である「人民の軍隊—人民、の關係のあり方、及び、それを包括するところの人民内部の團結のあり方、そしてその矛盾の止揚のあり方」の主題として、今回、の兩者不可分の冷徹たる現実を捉えると共に、その現実を皆無と置いていい程に、ほとんど、共有しえなかつたことにおいて、激變する連合赤軍の兄弟たちをして、今回の事態に至らしめた責任を、自ら自身を、五十歩百歩に同罪であることとして、共有せざるをえないし、かかる責任において、連合赤軍兵士自身の生きた政治的見解の公開の保障、事実關係の調査、各關係者の見解の集約、などの任務を通じ、近い将来、決して叔力の中にあるす、必ずや、人民の手中において、今回の現実が、そしてその主役たる連合赤軍の兵士たちが、審判され、全人民の教訓へと血肉化させるべく、その苛酷、かつ、長期にわたる作業の一翼を担うであろう。

最後に、心ある至ての兄弟たちへ、今こそ、原則を堅持し、大同團結し、斷乎として、その限りない恐怖ゆえに狂喜する叔力—マスコミの總攻撃に抗してゆこう。そして、何として、七〇年代版「六至協」の再演を許してはならないことを再確認しよう。

銃撃戦の開始 万歳!

故、連合赤軍兵士 追悼!

3月21日

92

我々は今回の事態に関し、つづる通信6号紙上に於いて日本赤色救護会を明らかにした。この声明に於いて我々は革命戦争とそれを担うところの人民の軍隊—人民の原則的な問題を再び確認した。それはまた、現時点に於ける我々の最低限度の運動方針の決定でもあった。従ってそれを物質化させるべく次のようなアンケートを獄中戦士に求めた。

★アンケートに関する獄中戦士と我々の確認事項、①このアンケートは10日以内に日本赤色救護会に集約する。

②アンケートを集約した後、個々の獄中戦士へ、個々の問題的視点の一応り解答を我々の考えを早急に書簡で送る。

③②を確認した獄中戦士は自らの考え、意見総括を日本赤色救護会へ書簡で送る。

④③の書簡をもとにして、今回の事態の総括の前提として、その全ての書簡を日本赤色救護会で整理、編纂し、全ての獄中戦士及び獄外戦士にこれを配布する。

《アンケート》

I. A 連合赤軍銃撃戦をいかに人民裁判に関する情報(新聞、コミック)の状況

B Aの状況より判断する戦士の考え、意見(尚、整理の便面上、この項の分量は原則として便セン3枚とする。)

93

II、この間の日本赤色救護会の諸活動及び機関紙に於ける通信に関する意見。

III、A 差入れ、面会(誰に)迄に於ける状況及び希望

B 健康状況

注、1、上述のアンケートは書簡で送ること。

2、対叔力の組織防衛、又味方内部の混濁を防止し、連行を強化につとめ、今後、差入れ接見、又通、情宣等の一切の対獄中、対市及社会間の赤救の代名詞として統一個人名称(松本一美)を採用します(今後の赤救宛り書簡、宅下げ等は「あ、つづる社気付、松本一美」とされたし。

團結!團結!

※本特集号に於いて以上の要領をまとめ上げた獄中戦士より赤救に寄せられた見解(アンケート)解答を以下掲載するものである。

—上野勝輝(東拍)—

I. A 読売新聞、その他若干の週刊紙だが、状況は「よくない」

B 革命の暗黒を吹き飛ばし反動の虎に勝ち抜ける赤い火を燃やそう!が僕の基本的な考え。骨格はD同志殺しの内因をとことん告発し、

94

えぐり出し、自己批判する事。それは、連合赤軍だけの問題でなく、あらゆる左翼、プロレタリア人民の思想にまで及ぶものであり、個人組織の自己批判を集中し、左翼の体質をとことん変える契機としなければならぬ。②①は党綱領問題へ物質化される方向に組織活動を系統化する事と同時に一体になされねばならぬ。その場合、綱領に體現しえない内因の不断的共産主義的高次化をはかるための共産主義思想、唯物弁証法、哲学問題を、綱領の背後に確立する方向が同時に必要。③④を今回の事件の持つ意味を歴史的階級的位階の上にはっきり位置づけねばならぬ、むなしいと、花園のようにテンデ民コロ以下(民主共産国のスローガン)といった、およそ百年昔の五億者至国かんなの下で革命をやるような問題を提起したりして、(六至協以下)に反ったり「銃撃戦支持」層を裏切るような変節をとげたりする。④⑤の上でようやく方針が設定される。そこでは、対連合赤軍、対人民、等々いろいろ、どうするかが、問われる。葬儀、調査報告文、総括方針共同討論機関の設置、等々この問題だけの方針と、全体の階級闘争(沖縄、学費、自衛隊、...)への方針確定が必要。それは、共産主義の大众的軍事路線をプロレタリアートの確立へ系統化する地下武装労働者党の建

95